

日本 SPF 豚研究会への期待

北 島 克 好
(日本 SPF 豚協会)

All about SWINE 63, 2-3

本年6月、日本SPF豚協会定時総会にて会長を退任いたしました。前赤池会長を引継ぎいつの間にか6期12年の長期間におよびましたが、その間協会を取巻く環境は激変してその対応に追われる中、日本SPF豚研究会の皆様には多大なご協力とご支援をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。今回、「協会から研究会への期待」についてとテーマをいただきました。

歴史を振り返れば、平成3(1991)年に協会から研究会が独立し、協会はSPF豚の生産者が所属する団体に特化し、研究会はSPF養豚関連の研究と周辺技術の開発・普及をする団体に分かれました。その後、時を重ねるにしたがって協会は「SPF豚の現実」、研究会は「SPF豚の理想」に舵が向いているのか相互の関係も年々希薄になってきていると感じていました。しかし、新型コロナを契機に時代が大きく変わる潮目に入りました。今こそ次世代に繋ぐSPF養豚を協会と研究会が密接に連携して模索し、新しい局面を切り開くべき時との期待を込めて2点紹介いたします。

1. 令和4(2022)年7月の研究会への要請

平成25(2013)年の豚流行性下痢や平成30(2018)年の豚熱の流行にさらに令和元(2019)年からのヒト新型コロナの流行は、農場や処理場

への入場規制から禁止となり、SPF農場認定事業に不可欠なヘルスチェック検査ができないことから3ヶ月の認定延期を申請する農場が続出しました。協会はSPF豚の存続を揺るがす危機的事態に、更に認定延期等を柱とする非常事態宣言を発して緊急対応を実施しました。ピラミッド認定関係者と会員農場の懸命な協力・対応で大多数の農場が認定を受けることができました。今後、ますます強化される農場や処理場のバイオセキュリティそして豚熱の拡大やアフリカ豚熱の発生が懸念される中で、将来を見据えた認定制度、ヘルスチェック検査についての議論は協会内部のみでなく、今こそ研究会の協力を得るべきと、研究会への期待に意見がまとまりました。令和4(2022)年7月、協会は研究会に課題解決への協力要請のヒヤリングの機会を得ました。「ヘルスチェック (AR・MPS) 検査の現状と今後 1.経過 2.調査結果 3.当面の対応 4.令和2(2020)年3月認定CM農場の抗菌剤とワクチンの実態 5.将来課題」について協会から実状と課題解決のために研究会の協力を要請しました。概略は以下の通りです。

- ① CM認定農場において、防疫管理(AD, AR, MPS ワクチンは使用を含む)の徹底でSPFの原点を維持している農場と排除疾病

以外の生産性阻害疾病 PRRS, PCV2 (サーコ), PPE (増殖性腸炎), APP (胸膜性肺炎), PED (流行性下痢) の影響が大きく、各々対応ワクチンと抗菌製剤を使用する農場が混在する実態データの解析

- ② 現行 CM 農場認定制度の継続を前提にした現行ヘルスチェックの検査に替わる新たな知見や検査方法を導入した見直し
- ③ ①, ②を超える将来の課題として、「SPF 豚とは何か」の問いに答えられる新しい SPF 豚と農場認定

2. 「協会だよりの提言」から

協会は年4回「協会だより」を発行し、各界で活躍されている方々から巻頭に提言をいただいています。平成27(2015)年1月から令和5(2023)年7月の間に提言を34いただき、15がSPF豚

の事業や協会運営に関するものでした。その内容から主な論旨では、SPF豚の日常管理徹底(4)、SPF豚の動物愛護と管理(4)、SPF豚認定農場制度の今後(3)、SPF豚の医療分野へ展開(3)について関心と期待が寄せられました。今後、研究会と力を合わせて取り組むテーマがあるのかもしれませんが。

協会設立から認定制度まで30年、社団法人化に10年、認定規則の改定まで12年、併せて50年。一つ成し遂げるまでに、10年を超す時間を弛まなく、諦めず、進めていかねばならないのが協会の歴史です。今年度から新しくスタートした協会の鷺谷新会長の提言(協会だより、No92, 2023)「手を取って」に加えて「手を取りあって難局に直面する険しい山登り」に研究会の参画を期待します。